

人間に成るといふこと



オオカミに育てられた少女という話を聞いたことがあります。怖い話ですね。その獣のような対象は、発見当初人間に初めて接したのか、警戒心が強く見られたそうです。彼女は

四つ足ですばやく移動する能力を持っていました。足の関節の可動域は、我々人間と比べると制限があったようです。人間界は彼女を保護して人間としての教育を始めますが、言葉を教えても限られた単語しか覚えられないなど、成果は上がらなかったと言います。そして彼女は短命で生涯を閉じたのでした。以上の話、実は現在では作り話と考えられています。しかし無視し得ないのは、『妖怪人間ベム』ではありませんが、実は人間も初めから人間なのではなく、人間に成っていく存在ではないかという視点が注目されたことです。

人間が人間に「成る」と言われても、私はこれまで人間っぽい外観で人間ではない生物に接した経験はないため、正直腑に落ちない点があります。中世キリスト教思想の影響のためか、人間は神の似姿を以て神に選ばれた存在で、神に代わって地球上の生物を管理し導いていく才を持つ、という考え方が今でも残存しているようです。しかし科学が進歩するにつれて、言語を操るとか文化を持つなどの様々な人間讃歌の根拠は、他の動物にも見られることが証明されて悉く消散し、遺伝子すら類人猿と大して差がないことが判明しました。そこで学術分野では致し方なく、人間とは何かという人間の定義を断念し、人間らしさとは何かという命題に舵を切っています。ドイツの哲学者ヤスパースは、人間が「在る」とは人間に「成る」ことを意味すると論じました。その視点で考えれば人間に成るといふ表現は、まさに人間らしさを身に付けることと言い換えることができるでしょう。

人間の妊娠期間は一般的に十月十日（とつきとおか）と言われます。当たり前と思われそうですが、しかしなぜその時期に、何のスイッチによって出産という現象が起こるのか。出産の契機についての研究は、まだその機構を詳らかに出来ていません。そうした中、一つの興味深い仮説があります。胎児の体重は受精後、日増しに増加していきます。しかし妊娠 40 週を過ぎる頃になると、むしろ逆に減少してくることが知られています。胎児を母体に寄生する生物と考えた場合、これ以上母体に栄養を頼ると自己の体重が更に

減ってしまう危険性があり、生命維持の危機に晒されます。そこで胎児はその時点で終に母体に見切りを付けて、外界へ進出する…。決して科学的に証明された説ではありませんが、常識的に考えると説得力は充分にあり、少なくとも胎児の体重減少が一つのきっかけにはなっている様に感じられます。この時期の胎児は、早く外界に出ようと画策していると考えることが出来そうです。

これに賛同するかのように、母体も早いところ出産しようと企てます。直立歩行に伴い産道が狭小化し、逆に胎児の脳容量は類人猿に比べて大きくなったため、少しでも出産の負担を抑えようと、小さいうちに産み落とす戦略を取るからです。かくして人間の赤ちゃんは、一人で生きていくための十分な成長を遂げないうちにこの世に誕生することになります。生理的早産と言われ、ゼロ歳児が子宮外胎児とも呼ばれる所以です。そこで人類はその未熟な子孫を守るために、群れを成すようになりました。子供は群れの中で、社会的に守られることになります。そしてこの集団の中での様々な体験が、人間らしさに結び付いていくと考えられます。もし人間の赤ちゃんが、牛馬のように生後すぐに独力で立ち上がることが出来たとすれば、果たして人間は人間に成れたであろうかという問題提起は、以前から人類学の分野で見られていました。生理的早産は、人間が人間に成るための必要条件と考えて誤りはなさそうです。しかし、逆に生理的早産さえ満たされれば、人間は人間に成れるのでしょうか。

イヌやネコは生まれて以降、放っておいても犬や猫に成長します。しかし人間だけはそうではありません。私たち人間は、人間に成る可能性を秘めて生まれてきただけのことです。人間らしさが人間社会の常識を身に纏うことならば、冒頭の少女はその機会に恵まれなかったために、人間には成れなかったということです。ところで世間を騒がす最近のニュースを見ていると、政治家から犯罪者まで、あちこちの分野に人間に成り切れていないと思われる生命体が繁殖し始めていると感じませんか。この社会には人間が人間に成りづらい構造的な欠陥がありそうです。そのような時代を生きる私たちは、人間らしさとは何かという問題を常に意識しながら、生涯を通して少しでも人間の完成型に近づいていくことが求められる、そのような手のかかる存在と思われれます。